

山添村古文書調査だより

奈良大学文学部史学科研究チームと山添村教育委員会による共同調査・研究

今春も2026年3月5日（木）～6日（金）の2日間にわたって、山添村教育委員会のご協力ですぐ古文書調査を実施することができました。奈良県山辺郡山添村での古文書調査は、これで22回目となりました。

調査場所として、今回は初めて山添村役場の会議室を使用させていただきました。

整理したのは、作業が途中になっていた葛尾の浜田家文書と北野の徳谷家文書、および新たにお借りしたやまぞえ小学校文書です。



やまぞえ小学校文書には、教科書類のほか、1898年の「学校改築要領」や学籍簿、戦前のアルバムなど、山添村の近代教育に関する基本史料が多数残されていました。また、1936年の「波多野村報」や1935年の春日尋常高等小学校発行『郷の光』など、国立国会図書館や奈良県立図書館情報館でも未所蔵の機関誌もありました。

さらに、近代文書だけでなく、数点の近世文書も含まれていました。文政6年（1823）「花踊入用割合覚め帳」、安政2年（1855）「花踊入用帳」という「花踊」についての記録があったのも目をひきました。文政6年のものは、6月に雨乞いを行い、無事に雨が降ったために8月に神への感謝で踊りを行った際の記録です。8月4日には春日、5日には「氏神様」、6日には針ヶ別所・福住、7日には助命村、浦久保の氏神で行っていることから、広範囲にわたる村落が共同で行った行事であることがわかります。この史料は、その「入用割合」、つまり費用を分担するために作成されたものです。「たいこうち」「かんこうち（鞆鼓打ち）」「ほふり（棒振り）」などの記載もあり、芸態をうかがう上でも貴重な記録となります。



北野の徳谷家文書には、18世紀初め頃の売券や村内寺院の極楽院に関するものなど、多数の近世文書がありました。元文4年の勘七から利兵衛に宛てた「売渡シ申山之事」には、「与力庄屋 源蔵」の記載がありました。「与力」とは、大和東山中でみられる民俗慣行で、家と家が「与力関係」を結び、冠婚葬祭など生活の場で互いに協力しあうというものです。前回の調査でも徳谷家文書では18世紀前半の文書に「与力」が確認されていましたが、今回の調査でも北野では18世紀前半という比較的早い時期の「与力」に関する記載が見られたことは注目されます。



近代文書では、1901年に柳本北別所の木村菊太郎（芸名・東玉）という人物が、徳谷氏をはじめとした人びとへ来臨を願う手紙がありました。同封されていた「万さい」と題された紙には、「徳若に御万さい」から始まる万歳の詞章と思われるものが記されていました。「二上り」と付記されているので、三味線の伴奏でうたわれたものだと思います。万歳とは正月に行われた祝福芸ですが、奈良にはかつて大和万歳があり、山添村にも伏拝に万歳が伝わっています。こうした芸能者の活動を具体的に伝える史料は、奈良県での芸能環境を考えるうえでも興味深いものと思われます。

芸能との関連では、年末詳ですが、「勧進元 松尾村 錦山常吉」らによる松尾村氏神での相撲興行にかかる引札もありました。徳谷家文書でとりわけ興味深いのが膨大な量の御札類です。どこの御札かわからないも



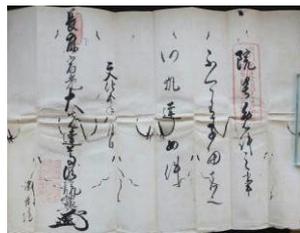


のも多く、かつ年代も不明なのですが、吉野・大峯山（奈良県）、熊野本宮（和歌山県）、伊勢（三重県）、津島（愛知県）、多賀（滋賀県）、金比羅（香川県）など広範囲にわたります。

これらの御札のなかには、包紙が残っているものもありました。例えば、津島のものには「御師 大矢部一之大夫」の名前が記されていましたし、熊野本宮のものには「御師 尾崎太夫」と記されています。こうしたことから、これらの御札の多くは御師などの宗教者によって、徳谷家に届けられたものであろうと思われます。



また、包紙が捨てられず、もとのままのかたちで残されていたことで、御札がどのような状態で届けられたかがわかることも貴重です。御札のなかには熊野本宮の牛王宝印が複数見られましたが、そのなかに「尾崎太夫」の包紙に包まれた状態のものもありました。熊野以外の場所でも護符や起請文などに熊野の牛王宝印が使われる例がありますが、熊野牛王が御師の手で各地に運ばれていたことがわかります。



もっとも、徳谷家文書のなかには文化5年（1808）、修験道総本山のひとつである尊瀧院（岡山県）が徳谷家の要助に対し、修験者として桃地結袈裟の着用や院号の使用を認める許状も残されています。このことから、少なくとも19世紀の初めには徳谷要助自身も宗教者として活動して



いた時期があることがわかります。御札の一部は、要助が宗教者として活動するなかで集まったものかもしれませんが。これらの御札がどのような過程で集まってきのかについては、さらなる慎重な検討が必要でしょう。

御札については概要の確認にとどまり、詳細な調査はできませんでしたが、膨大な量の御札が整理され、分析がなされれば、山添村の宗教環境や民間宗教者の活動実態について、様々なことが明らかになるものと思われます。

今回も日帰りのため作業時間は少なくなりましたが、参加学生のみなさんの努力により、調査は順調に進捗しました。

葛尾・浜田家文書は作業途中だった箱4の79～107まで計29点のカード作成を終えました。北野・徳谷家文書は、箱1が104～229（作業途中）、箱2は1～42（終了、計42点）、箱3が1～131まで（作業途中、計131点）、やまぞえ小学校文書は、箱1～3まで整理を終え、箱1が1～48（計48点）、箱2が1～63（計63点）、箱3が1～53（計53点）。2日間で合計492点のカードをとることができました。

調査参加者は、本学学生有志延べ41名（5日は22名、6日19名）です。

教員は、奥本武裕、海津一郎、河内将芳、木下光生、森川正則、村上紀夫の6名があたりました。

山添村での調査は今後も継続していきたいと考えています。調査にあたって便宜を図って下さったご所蔵者と山添村教育委員会の皆様にお礼申し上げます。

